

朝日元記者に本当に問われていることは何であるか

2014年8月の朝日の慰安婦問題検証記事のなかで、植村隆元同紙記者に関して次のように取り上げられている。

【〈疑問〉元朝日新聞記者の植村隆氏は、元慰安婦の証言を韓国メディアよりも早く報じました。これに対し、元慰安婦の裁判を支援する韓国人の義母との関係を利用して記事を作り、都合の悪い事実を意図的に隠したのではないかと指摘があります。

問題とされる一つは、91年8月11日の朝日新聞大阪本社版の社会面トップに出た「思い出すとも涙 元朝鮮人従軍慰安婦 戦後半世紀重い口開く」という記事だ。

元慰安婦の一人が、初めて自身の体験を「韓国挺身（ていしん）隊問題対策協議会」（挺対協）に証言し、それを録音したテープを10日に聞いたとして報じた。植村氏は当時、大阪社会部記者で、韓国に出張。元慰安婦の証言を匿名を条件に取材し、韓国メディアよりも先んじて伝えた。

批判する側の主な論点は、①元慰安婦の裁判支援をした団体の幹部である義母から便宜を図ってもらった②元慰安婦がキーセン（妓生）学校に通っていたことを隠し、人身売買であるのに強制連行されたように書いたという点だ。

植村氏によると、8月の記事が掲載される約半年前、「太平洋戦争犠牲者遺族会」（遺族会）の幹部梁順任（ヤンスニム）氏の娘と結婚した。元慰安婦を支援するために女性研究者らが中心となつてつくったのが挺対協。一方、遺族会は戦時中に徴兵、徴用などをされた被害者や遺族らで作る団体で挺対協とは異なる別の組織だ。

取材の経緯について、植村氏は「挺対協から元慰安婦の証言のことを聞いた、当時のソウル支局長からの連絡で韓国に向かった。義母からの情報提供はなかった」と話す。元慰安婦はその後、裁判の原告となるため梁氏が幹部を務める遺族会のメンバーとなったが、植村氏は「戦後補償問題の取材を続けており、元慰安婦の取材もその一つ。義母らを利する目的で報道をしたことはない」と説明する。

8月11日に記事が掲載された翌日、植村氏は帰国した。14日に北海道新聞のソウル特派員が元慰安婦の単独会見に成功し、金学順（キムハクスン）さんだと特報。韓国主要紙も15日の紙面で大きく報じた。

植村氏は前年の夏、元慰安婦の証言を得るため韓国を取材したが、話を聞けずに帰国した経緯もあり、詳しい取材のいきさつは、朝鮮半島問題を扱う月刊誌「MILE（ミレ）」（91年11月号）に書いた。この時期、植村氏の記事への批判はまだ出ていなかった。

また、8月11日の記事で「『女子挺身隊』の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた『朝鮮人従軍慰安婦』」などと記したことをめぐり、キーセンとして人身売買されたことを意図的に記事では触れず、挺身隊として国家によって強制連行されたかのように書いた——との批判がある。

慰安婦と挺身隊との混同については、前項でも触れたように、韓国でも当時慰安婦と挺身隊の混同がみられ、植村氏も誤用した。

元慰安婦の金さんが「14歳（数え）からキーセン学校に3年間通った」と明らかにしたのは、91年8月14日に北海道新聞や韓国メディアの取材に応じた際だった。キーセン学校は宴席での芸事を学ぶ施設だ。韓国での研究によると、学校を出て資格を得たキーセンと遊郭で働く遊女とは区別されていた。中には生活に困るなどして売春行為をしたキーセンもあり、日本では戦後、韓国での買春ツアーが「キーセン観光」と呼ばれて批判されたこともあった。

91年8月の記事でキーセンに触れなかった理由について、植村氏は「証言テープ中で金さんがキーセン学校について語るのを聞いていない」と話し、「そのことは知らなかった。意図的に触れなかったわけではない」と説明する。その後の各紙の報道などで把握したという。

金さんは同年12月6日、日本政府を相手に提訴し、訴状の中でキーセン学校に通ったと記している。植村氏は、提訴後の91年12月25日朝刊5面（大阪本社版）の記事で、金さんが慰安婦となった経緯やその後の苦労などを詳しく伝えたが、「キーセン」のくだりには触れなかった。

植村氏は「キーセンだから慰安婦にされても仕方ないというわけではないと考えた」と説明。「そもそも金さんはだまされて慰安婦にされたと言っていた」といい、8月の記事でもそのことを書いた。

金さんらが日本政府を相手に提訴した91年12月6日、別の記者が書いた記事が夕刊1面に掲載されたが、キーセンについては書いていない。その後も植村氏以外の記者が金さんを取り上げたが、キーセンの記述は出てこない。

■読者のみなさまへ

植村氏の記事には、意図的な事実のねじ曲げなどはありません。91年8月の記事の取材のきっかけは、当時のソウル支局長からの情報提供でした。義母との縁戚関係を利用して特別な情報を得たことはありませんでした。】

この植村隆元記者が「慰安婦問題『捏造記者』と呼ばれて」という独占手記（『文藝春秋』15.1）を發表している。元記者は「捏造記者」というよりも、思い込みの激しい「思慮の足りない記者」、というのが、独占手記を一読した率直な感想である。説得力もなく、少しは期待していたのだが、期待はずれだった。すでに元記者は訴訟を起こしているが、行きつくところは「泥仕合」になるのが落ちだろう、ということを示唆させる内容でしかなかったのである。

問題の一つとなっている「女子挺身隊と慰安婦の混同」については、朴裕河もいうように、彼が記事を書いた23年前の1991年当時はその「混同」も仕方がなかったという面もあったが、本当の問題はそこにはない。この問題について、「我々はなぜこの手記を掲載したのか」という『文藝春秋』編集部が、次のような疑問を提出している。

《…元慰安婦の情報を提供してくれた尹貞玉・韓国挺身隊問題対策協議会共同代表が、

〈「私たちにとっては、挺身隊がすなわち従軍慰安婦なんです。戦争中、女子挺身隊の名で徴用された女性たちの多くが、慰安婦にされたのですから」〉

と説明したから、そのまま書いたのだと主張する。

これには首を傾げざるをえない。我々雑誌も残念ながら間違えることがある。その時、他誌も間違えたのだから仕方がないとか、取材先の言った通りに書いたのだから責任はないと釈明することは許されない。》

それはその通りであるが、別のいいかたをしてみる。この挺対協共同代表の説明に対しても、ジャーナリストとして「すべてを疑ってみる」態度で臨むべきであったなどと、思慮不足の熱血漢らしい彼に要求するつもりは毛頭ない。しかし、朝日の慰安婦問題検証記事のなかで、〈朝日新聞は93年以降、両者を混同しないように努めてきた〉と強調していたように、彼も混同したその二年後には、女子挺身隊＝慰安婦ではないことが明らかになりつつあったのである。日本で「混同」が訂正されるなかでも、彼が疑ってもみなかった挺対協は「混同」を知りながら、すでに「混同」が明らかになっていることを認めて訂正せずに、海外に慰安婦物語を広めるために「混同」に乗っかって「20万人以上の慰安婦」を主張し続け、慰安婦像等の碑文に書き刻んでいった。

このようにみえてくると、彼にとっての問題は多くの記者と同様に彼も両者を混同してきたことにあるのではなく、混同が明らかになった時点でも、それ以降も自分が混同した記事を書いてきたことに対して、さらに混同についての挺対協の虚偽証言が続いていることに対して、かつての自分の記事を検証しながら、何も言ってこなかった点にあることに気がつく。つまり、黙認しつづけてきたことにあるといってよい。もし彼が混同したのは自分だけではなかったと主張してきたように、混同の是正についても何も言ってこなかったのは自分だけではないと主張するのであれば、ジャーナリストとしての態度からはあまりにも遠ざかっているといわねばならない。

それだけではない。かつての混同に乗っかって慰安婦問題に対する理解を歪めてきたことに対するジャーナリストとしての責任を痛感するなら、その後の慰安婦問題に対する正しい理解を日韓双方に広めるために、そして日韓の和解にむけてさまざまな発言や行動を自分に要請する必要があったにちがいない。少なくともそうせずにはいられないほどのかわりを慰安婦問題に見出してきたはずである。ところが、今回の独占手記は自分に対する批判～非難についての弁明に満ちており、その水準を超えるところでの発言～提起の位相は微塵もみられない。ずっと沈黙しつづけてきたのであるから、それは当然のことなのであろう。しかし、彼には沈黙することが許されていなかったという一片の自省すら感じられないところでの手記であることを、無惨にもさらけだしていたのである。